

合研 24 分科会の報告

合研 24 分科会は 11 月 2 日（日）高校教育センター 4 階で行われました。開会に先立って、長年共同研究者をされていて、10 月に鬼籍に入られたト部喜雄さんに黙祷を捧げました。

今年度の提出レポートは今川大海氏の「それぞれの不登校支援学級 5 年生～行きたくなる学校とは？「学校」を相対化する～」の 1 本でした。小学校の特別支援学級の生徒を担当し不登校になる生徒がいて、支援学級を避難所であり彼らの活動拠点である「居場所」にすることを意識して担任をしている。学校の意味を問い直し、こだわりをほどこいていく（今川氏は「相対化」と表現している）ことで生徒に寄り添っているレポートでした。最後に今後は「不登校の子がどのような思いを持っているのかを生徒と一緒に考えたい」と締めくくりました。

レポート以外に「函館のフリースクールすまいる」の庄司氏と鹿追高校の米川先生から報告がありました。

庄司氏は函館市内の中学校の校内教育支援センターの支援員で、5 名採用されている支援講師のうち民間からの採用は庄司氏 1 名（後は退職校長等の元教員）です。庄司氏は校内教育支援センターを教室に入ることが出来ない生徒の「居場所」とするため、「学習を強要せず」「授業中の出入りも出来る」「教室復帰を前提としない」こと等を教員に周知し、このことで生徒は安心して学校に登校出来るようになりました。また、結果として教室に戻る生徒も増えたことで、教員の理解もさらに深まったと報告しました。質疑の中で、文科省の不登校対策である COCORO プランは不登校の生徒も「学ばせよう」とするものであるが、これが出る前に始まったことで「休むことが出来る居場所」を提供できているのではないかと話し合われました。

米川先生が勤務する鹿追高校は、2023 年度から「地域未来留学」による全国募集が行われています。この制度が始まる前は 2 クラスで 50 人前後の入学者だったのですが、全国募集により 80 名弱の入学者があつまるとなり、クラスの人数が 40 名になることもあります。入学者の多くが不登校や長期欠席を経験した生徒で、中には「クラスにこんなに人がいるとは思わなかった」と教室に入り辛い思いをしている生徒もいます。また海外短期留学が学校行事の目玉ですが、これが終わると目標を失ったのか学校から遠ざかる生徒もいて、担任として何をすべきか悩んでいるという報告でした。共同研究者から市場原理で入学者の少ない公立高校の統廃合が進められている現在、地域の高校を維持するため「地域未来留学」や「海外留学」を導入しているが、キラキラ輝いて見えるのは大人だけなのではないか、という指摘がありました。

23 名の参加者（会場：15 名、リモート 8 名）のほとんどの方に発言していただき、活発な討議がなされ、分科会の最後に共同研究者の山田さんは「不登校は人が大きくなるために必要なものだが、学校は進学や就職のことしか考えていない」「いろんなルートを辿って人生が豊かになるのだが、ここに学校がどう関わるのかを考えなければならない」と課題を提起され、同じく共同研究者の門前さんは「(1 日の交流会も含めて) 不登校の子をもつ親と先生方がつながることが出来た合研だったと思う」と感想を述べ分科会を終了しました。

文責 新保 敦